**№55　テーマ『歴史をつくる』**

**講話日2012年10月15日**

**こんにちは、ただいまご紹介いただきました芳村思風です。どうぞよろしくお願いします。今日は「歴史をつくる」というテーマでお話をさせていただくことになっております。我々がこの時代に生まれてきたのは何のためか。それはこの時代を一歩前に進めるという歴史をつくるという、そういう仕事をするために我々は皆生まれてきたんだという風に考えることができます。我々が生まれてきたのは、新しい時代を呼び起こすためである。これが全ての人間が生まれてくるということのもっとも根本にある理由だという風に考えることができるんですね。それはどうしてか。歴史をつくろうとするためには、今までの人間が誰もやったことがないことをやらないと歴史はつくれません。そのために我々は、皆誰しも新しい時代をつくるための、今までになかった力というものを命に与えられて皆出てきているという風に言うことができるわけであります。それはどういうことなのかというと、皆両親から生まれてくるわけですけど、生まれてくる子は過去の人間のふたり分の可能性を一身に受けて生まれてくる、そういう理解の仕方ができるわけです。生まれてくる子は、お父さんお母さんから遺伝子をもらって、そしてひとつの命として生まれてくる。現実的に子は親を超えて生まれてくる。子どもは生まれながらに親の世代を超えて生まれてくるんだと言って過言ではありません。よく考えてみると、両親から遺伝子をもらってくるだけでは遺伝子は核ですので、ただ両親から遺伝子をもらってくるだけでは新しいことをすることはできません。なぜ子どもたちは新しいことができるのか。いつの時代でもそうですけど、昔から常に大人たちは若い人たちに対して「今の若いもんは！」と言って、任せきれない・頼りにならないという気持ちを大人たちは若者に持つわけであります。そんな若者たちが、20年30年経てば大人たちがまだ見ぬ未来を確実につくり出す。それまでになかった新しい製品をつくり出したり、それまでになかったいろんなものをつくり出して、確実に新しい時代をつくるという生き方をしてきた。結果として今日まで歴史が刻まれております。**

**一体なぜ大人たちから頼りないと思われていた若者たちが必ず20年30年40年50年と経てば、それまでに全く見たことがないような全く新しい時代をつくり出す力を持っているのか。その理由はなんなのか。子どもは両親から生まれてくるのですが、命というのは有機体であります。単に両親から遺伝子をもらってきた足し算ではない。遺伝子というものが命の中で有機的に絡み合って、お父さんお母さんの遺伝子が子どもの命の中で有機的に絡み合って、相乗効果として湧いてくるのがその子の力なんですね。相乗効果というのは掛け算ですので、そういう意味では相乗効果=シナジー効果は、過去に全くなかった新しい力である。皆、誰もがそういう力を持って生まれてきているんですね。だから皆、新しい時代をつくる可能性を命にはらんで、そういう力を与えられて生まれてきていると言うことができるわけであります。それがゆえに、人間は新しい時代をつくるために、新しい時代をつくるために生まれてきていると、言うことができるわけですね。**

**特にこの時代に生まれてきたということは、この時代において何かしら時代を一歩前に進める。あるいはこの時代において出てくる問題を乗り越えて、そして時代を一歩前に進めていく、そういうことに関係する能力を人間は与えられて生まれてきていると言うことができます。これを天分と言います。人間は誰でも皆、生まれてきたからには、この時代においてなにか仕事をしなければならない。あるいはこの時代において何か役に立つ仕事ができるための独特の個性ある能力を与えられて生まれてきていると言えます。では、なぜそういうことがわかるのかということなんですけど、個性ある能力というものを最も象徴的に示すものが顔なんですよね。顔は全人類皆違う。顔が違うということが実は、その人間にはその人間独特の能力、力というものが与えられているということを証明している。それは、顔は何で決まるかに関係しています。顔の形を決めるのは遺伝子です。遺伝でだいたい顔の形は決まってしまう。遺伝子は能力が物質化したもの。これは最近のヒトゲノムの研究でわかってきております。能力が物質化した遺伝子によって人間の顔の形は決まって、その顔の形は全人類皆違う。ということは、顔の形が違うということは、自分には自分にしかない独特の能力があるんだと、証明することになるわけです。この時代において、この時代に出てくる問題を乗り越えて、そして次の新しい時代をつくるという仕事をするために独特の力を与えられて生まれてきています。**

**しかも自分の顔というのは、両親からもらってきた遺伝子は相乗効果で絡み合って出てきたものが表現されたものですから、過去にも全くなかった顔であって、また将来にもないであろう顔なんですね。つまり、歴史的に一回きりだと、そういう認識を我々は持つことができるわけであります。相乗効果によって自分の能力は出てくるし、自分の顔も決まる、そういうことになってきます。もちろん、自分の顔は両親に似ているということはあるんですけど、全くそっくりということはなくて、ちょっと似ているけど、ちょっと違う。そして、この時代に生まれて、そして今まで誰もやったことがないことをやって生きて死んでいく…そういう力を皆、人間は持っているんだということを意味しているわけです。そういうところから我々は、皆この時代に生まれてきたからには、今までの人間が誰もやったことがないことを何かやって、そして社会、時代に貢献して、そして次の新しい時代にバトンタッチしていく。そういう生き方をするように我々の命ができているわけです。**

**そういうこれまでに全くなかった新しい力というものをどのように使うのかということなんですけども、そのために今の時代にはさまざまな問題があります。歴史というものは今の時代にある問題を解決することによって、歴史は一歩前に進むという、そういうことになっていくわけなので、我々の目の前にある問題というのは人間に歴史をつくらせるために出てくる、と言うことができるわけです。基本的に問題は人間を一歩成長させるために、会社を発展させるために、あるいは社会を良くするために出てくる。今会社に新しい問題が出てくるということはどういうことかと言うと、この会社をもう一歩高い次元に成長させようとしている。問題というのは何かに気付かせて、何かを教えて、何かを伝えようとして問題は出てきています。そのことによって我々はなぜこういう問題が出てきたのであろうと反省する。問題というのは起こした人を責めるのではなくて、何かを発展させよう・良くしようとする意図を持って出てきています。決して問題というのは悲観する・嘆く必要はない。問題が出てきたことはチャンスだと考えなければならない。問題は、人間を一歩成長させるために、会社を一歩発展させるために、社会を良くするために出てきていると、我々は受け止めなければなりません。**

**そして問題というのは、今我々が持っている力で解決できる問題は、そんなものは問題ではない。本当の問題というのは、今自分の持っている力では如何ともし難い…なんともならん…万策尽きたと思わせるような問題こそ、本当に会社を発展させるために出てきたものであり、本当に人をもう一歩成長させるために出てきたものであり、もう一次元社会を発展させるために出てくる問題であると、我々は理解しなければなりません。今の日本や世界にはさまざまな問題が横たわっています。その問題すべて我々が持っている力では解決し難いというものばかりです。今深刻になっているのは、領土問題。日本と中国の間位に尖閣諸島という問題がある。また日本と韓国の間には竹島問題、日本とロシアの間には北方領土。なかなか話合っても解決できない。お互いに「我が国の領土だ」と言ったり、中国や韓国は「我が国、固有の領土だ」なんてことを言うわけです。日本もやっぱりそれに反抗をして対立する。そういう状況で深刻な国家間の経済・政治に障害が出てきているというのが現状であります。**

**こういう問題も全てこれは時代を一歩前に進めるため、新しい時代をつくるために出てきている問題という風に捉える必要があるわけです。では、この問題をどのように乗り越えたら時代は一歩前に進むのか。それが今この時代に生きている我々の課題、与えられた課題、我々を成長させるために与えられた問題という風に言うことができます。これは個人の問題ではなくて、国家の問題だろうということで、国民一人ひとりが国家に任せて、「勝手に任しとけ、俺は知らんわ」という感じで問題に無関心でいる方もいらっしゃると思います。だけども、こういう問題をどういう風に乗り越えたら良いのかを考える、そのことが自分のこれから目の前に出てくる問題に対する対処能力というものを成長させてくれる。ということになってくるわけなんですよね。そういう意味では、今国家にある問題、世界にある問題は、今の時代に生きる全ての人に考えてもらいたい、そういう意図を持って出てきていると考えて、「俺ならどうするか」ということを是非考えてみてもらいたい。そのことによって人間としてもっともっと大きい人間になれるし、新しい問題に対して対処することができる力が引き出されるということになってくるわけであります。**

**そこでこの領土問題をどう乗り越えるかということなんですが、多くの方々は「とにかくこれは日本の領土なんだから、そんなに簡単に渡してはいけないと。もっと強く出て、我が国の領土だと主張して、守るのが大事だ」と。そのようにどちらの領土か決着をつけようというで、日本は国際司法裁判にかけてでも日本の領土であると世界に認めさせようと考えているわけです。だけども韓国も中国もそんなことに応じない。「これは議論の余地がない、我が国の固有の領土だ」と。そういう意味では勝ち負けを争う、とにかくは永久に平行線と言うか、解決しない争いとして続くんではないかという状態となっています。この問題を歴史をつくる、時代を一歩前に進める、発展させるという方向性で処理しようと思ったら、我々はどういうことを考えなければならないか。そのための知恵が湧いてくるかどうかは、やはりこの問題以外のいろんな問題に対応したときに乗り越える新しい知恵が湧いてくるかどうかにも関係します。そういう意味では訓練、練習の場として、こういう問題をどう処理することかを自分自身で考えなければならない。この時代の問題というのは確実にその時代に生きる人間を成長させるために出てきているという意味があります。我々皆がそれに対してどうしようかと考える、そういうことが要求されているわけです。**

**一体どういう風に対処したら良いのか。それを解いていく糸口、あるいは問題を処理する判断基準が大事になります。その問題を処理していく判断基準が4つほどあると考えております。第一番目は、領土はそもそも誰のものでもなかった。もともと土地は誰のものでもなかった。それが歴史のさまざまな経緯でお互いにり合いをしてきて、力比べで争い合いをして力の強い者がたくさんの領土を取るという形でやってきたわけであります。人類はもともとはアフリカ中部の大地溝帯から生まれて、どんどん広がっていったと言われています。だから、最初は誰のものでもなかった。歴史の過程、いろいろな力関係で誰のものになるかが決まって今日まできたに過ぎない。基本的に固有の領土というものは存在しない、ということをちゃんと認め合う必要があるのではと思います。お互いが固有の領土だと言って譲らないんですが、そもそも固有の領土というものはあり得ない。このことをまずは話し合いの前提として確認し合わないといけないと思います。そして、領土は力関係によって奪い合って今日まで至っているのだと。先日も中国・外務省のスポークスマンが、「日清戦争の後、尖閣諸島は日本が中国から奪い取った・盗み取った」と言っていました。そう非難していましたが、その事自体、今は日本の領土であると認めてしまったということ。これは失言なのではと思いましたけどね。基本的に固有の領土というものは存在しない、ということ。領土はそもそも誰のものでもなかった。もともと土地は誰のものでもなかった。**

**第二番目に大事なことは、今の時代というのは統合という言葉によってあらゆるものが動き始めている。時代を動かす原理は、統合。統合こそ今の時代を動かすキーワードだ、ということを第二番目に考えなければなりません。第三番目にはこれから地球は西洋文明と東洋文明が融合していって、将来は地球文明、世界文明ができていって、地球には地球政府・世界政府ができるという流れで人類史は進んでいるというものの見方をしていくことが歴史の方向性を見つめるときに大事になってきます。やがて地球は一体となって世界文明ができて、そして世界政府できていくんだということを考えれば、とにかくこれから我々は人間が人為的・作為的につくった国境というものをなくして、国境を越えてすべての国や民族がお互いに関わる、交流するという状態をつくっていかなければならない、ということが見えてくるわけです。そういう大きな歴史の流れを意識において、今の問題を処理することを考えなければならない、ということなんですよ。**

**最後の第四番目の判断基準となることは、これまでは競争して勝つということを最高の目標にしてきましたけど、競争して勝つということがいかに人間の心を蝕んで、人間から血の通った温かな心を奪うかがはっきりわかってきました。結果としてどういう価値観が新しく出てきているか。競争して勝つことよりも素晴らしいことは、力を合わせてともに成長することだということ。そういう価値観が出てきているということです。勝ったら負ける者をつくってしまう。負けた者の恨みが勝った者に返ってくることになりかねない。これから大事なことは勝って負ける者をつくるような生き方をするのではなく、勝つことよりも素晴らしいことは、力を合わせて成長すること。この価値観の方がより高度な、より進んだ考え方だ。**

**そういう四つの判断基準を原理にして、領土問題をどう対処したら良いかを考えていく。とにかく条件としては固有の領土なんてないんだ。統合という言葉が時代を動かしているんだ。やがて地球は人為的につくられた国境を越えなければならない。勝つことよりも素晴らしいのは、力を合わせて共に成長することだ。この四つが領土問題を解決するための判断基準として考えなければならない原理だと。これを土台にして領土問題をどのように解釈したら良いのか。尖閣諸島は日中の問題なんですけど、それをどのように解釈するか。尖閣諸島を日中共有の領土にして、日中友好の懸け橋にする、日中友好の絆にする、尖閣諸島こそ日中友好の証しだという位置づけに持っていって、そして尖閣諸島を共有の領土にする。そのことによってお互いに尖閣諸島というものを通して、協力し合って海底資源を開発する。あるいは漁業権というものをお互いに分け合う。協力的な関係に持っていくという話し合いのテーブルをつくることが、平和裏に問題を処理して、そして国家間の友好関係を前進させていくために大事な解決策じゃないかと思われるわけです。これが先程の四つの判断基準を原理にして出てくる答えであります。だけど今はほとんどそうい**

**うことは考えられてなくて、どちらの領土か決着をつけようという古い近代的な勝ち負けの関係、争いごとに持っていってしまっているのが現状であります。それでは新しい問題を乗り越える力というのは出てきません。**

**同様に竹島の問題もこれも韓国と日本との間の問題ですから、竹島は日韓共有の領土だということにして、竹島というものを日韓友好の架け橋にする、日韓友好の絆にする、日韓友好の証として竹島を共有の領土にし、海底資源を協力して開発していく。どちらの領土か決着をつけようということより、高度な解決の仕方になっていくんじゃないかなと。そういう風に考えることができる。北方領土もこれも日露友好の絆、日露友好の証、日露友好の架け橋ということにしていって、そして共に北方領土を開発し、協力して物事をやっていくという関係性に持っていく。これが将来は人類全体が国境を越えて、共有しなければならないということを見通しながら、やっていくやり方になります。日本人が人類初めての提案を世界に向かってやって、これからの国境問題の解決の仕方の見本を見せる。そういうことをやっていかなければならないんじゃないかと思います。これまでのアメリカのように勝ち負けを争って決着をつけるのではない。もうアメリカは世界の指導者ではなくなっている。今アメリカに代わって人類・世界の指導者とならなければならないのは、日本人だ。中国はまだまだ後進国であって経済的な生産力でも国民ひとり当たりは1/10。そういうことを考えれば、まだまだ中国が今の時代の問題を正しく解決に導くことはできない。今こそ日本人がいろんな問題においてオピニオンリーダーとなって、人類に新しい解決策を提言していく役割を果たしていかなければならないと思うわけです。もっともっと我々日本人は自信を持って世界に向かって教えていかなければならないとも思います。**

**これは東北の大災害からもそういうことが言えるのであって、災害以前は日本国内でも世界においてもいろんな違いを理由に戦う、喧嘩する、憎しみ合うということが続いていました。震災後は国会も休止となり、与野党が協力してことにあたっていこうとなりましたし、また全国民も被災された方々の悲しみに手を差し伸べたいという思いが全国に走りました。全世界も日本の悲惨な災害を見て見ぬふりはできないと、義援金や物資が届いたり、ボランティアやスタッフが日本にやって来てくれました。被災地を助ける活動をしてくれたわけであります。そういうことから一体人類は何を学んだかと言うと、どんな大きな出来事でも皆が力を合わせたら乗り越えられるという思いを持ったわけであります。それまでは勝ち負けを争っていたけれども、あの災害の後はどんな問題でも皆が力を合わせたら必ず乗り越えられるという信念を持つことができた。これはそれまでにあったリーマンショック、これはアメリカの経済問題だったわけで、アメリカが責任を持って処理しなければならない問題でしたが、一国の力ではなんともならんということで全世界の中央銀行が協力して、世界的な金融恐慌にならないように食い止めて、今日までやってきたわけであります。あれもやはり利害や損得や勝ち負け、考え方を越えて、とにかく力を合わせないとなんともならんという状況が出てきて、実際問題皆が力を合わせて乗り越えたわけであります。**

**今のユーロの問題でもあらゆる利害はあるけれども、一応ギリシャ、スペイン、イタリアの問題もユーロ圏だけではなく、全世界の銀行、経済界がお金を出し合って乗り越えていこうという機運が高まっています。これまでの国際社会における問題を処理するやり方にはなかった新しいやり方、力を合わせて共に成長していこうという考え方が出てきているということができるわけです。とにかく、大事なことは全社員が力を合わせたならば、どんな会社の問題でも必ず乗り越えられる。全家族が損得、利害、考え方を越えて皆が力を合わせたら家庭の中で起きるどんな問題でも乗り越えられる。国家の問題でも全国民が力を合わせたならば、どんな問題でも怖くない。また世界における問題でも全世界が力を合わせたならば、どんな問題でも乗り越えられる。そういった新しい生き方を人類はいろんな問題を通して体験しているわけであります。そういう意味においても尖閣諸島や竹島、北方領土の問題もどちらの領土かを決めようという、勝ち負けを争うのではなく、とにかく共有の領土、統合という考え方で、国境を越えてお互いに協力をし合って開発をしていくのが、これからの時代の要請に沿った解決策ではないかと、私は考えているわけであります。これが感性論哲学という感性を原理にして、理屈ではなく感性を原理にして問題に対処することで出てきた解決策と言うことができるわけであります。ぜひそのことも皆さん方も参考にして、自分ならどういう風な解決策を提案するか、ぜひ考えてみてもらいたいと思うわけであります。他人ごととしてほっとくんじゃなくて、「俺ならどうするか」「どういう提案をするか」を考えてもらうことが、皆さんが今なさっている仕事から出てくる問題を処理するためにも、有効な訓練になるんじゃないかと思われます。**

**その次は原発の問題ですね。原子力発電。東北で原発の事故が起こってしまった。多くの方々が命に関わるような事故なんだから、もうこれはとにかく原発というのは危険を冒してまで使うようなものではない、と。もう原発は全廃しなければ、というのが多くの方々の意見になってきております。だけども経済界からするならば、原発のエネルギーがなくなってしまったらたちまちにして経済活動は委縮して、そして十分な生産をしていくことができなくなる。何らかの形で原発のエネルギーは使っていけるようにしていかなければならない、というのが経済界では要求をしておるわけであります。一般の市民からすれば、「もう原発はもういらん」という考え方が非常に強い。これもどういう風に乗り越えて、解決したらよいのか。問題というものは人間を成長させるために出てくるんだということから考えるならば、原発の問題も人間を成長させるために、社会を発展させるために、会社を発展させるために出てきていると。そういう理解の仕方をする必要があります。**

**だとするならば、問題が起こったんだから、もうそれはやめておかなきゃならないというのは、これは明らかに問題というものがなぜ出てきたのかという理由を知らない、軽薄な対応だと言わなければならないと思います。問題は人間を成長させるために出てきたんだという風に考えないで、問題が出てきたら「もうこれはやめておかねばならない」…これは明らかに問題からの逃げなんですね。人生の生き方ということからしても、問題から逃げれば成長は止まる。問題や悩みというのは人間を成長させるために出てくる。そうでなければ人間も社会も会社も発展してない。問題が出てくるから会社は発展するんだ。犯罪や事故が起こるから社会は発展するんだ。そう考えることができるわけであります。そう考えるならば、問題が起こったんだから原発を止めなければならない、というのは明らかに逃げということができるわけです。けれども、多くの方々が問題が起こったら、間違ったことをやっているんだから、もうやめなければならないと考える。これは理性によって物事を解決しようとすると、そういうことになるんですよね。理性というのは、「問題が出てきたらやり方が間違っているんだから、もうそのやり方はやめなければならない」と考える。これは人間に完全性を求める理性の立場からの対処方法であります。問題が出てくるということはやり方が間違っているんだ、そう考えるのが理性的な判断なんです。感性ということを考えると、問題はその問題を乗り越えさせて、あらゆるものを発展させるために出てくるというのが、感性という観点から「問題とは何なのか」ということを考えた場合の答えであります。そのように考えれば原発の事故という問題も、やはり人間を成長させるために、社会を発展させるために、会社を発展させるために出てきたという風に理解をしなければならない。だから問題から逃げるんじゃなくて、問題に立ち向かっていくという対処法が正しいという風に言うことができるわけであります。**

**では、具体的にはどういうことなのかと言ったら、確かに原発の問題は人間に恐ろしさを感じさせるような事故なんだけど、まずはとにかく原発の事故の放射能問題なんですよね。このことを契機にして人類は、放射能への不安から人類を救うという研究をし始めなければならない。つまり、放射能への無害化の研究をする、放射能を害のないものにしていく。そういう研究をする。それから放射能の有効利用の研究をする。無害化と有効利用によって、将来人類は放射能を恐れない。そういう状態をつくっていく。そういう新しい力を人類が持つために問題は起こったんだという風に考えなければならないわけであります。どんなものにもプラス面とマイナス面があるんですよ。今は放射能の恐ろしさだけが強調されてしまって、プラス面があまり浸透していない。必ず放射能にもそれを利用して活用できて人類のためになるものがあるはずだと、考えなければなりません。実際問題、レントゲンというのは放射能を微量に使って人間の病気の箇所を特定する、状態を調べるという活用法がなされています。**

**とにかくは、放射能でも50%から害になるが、50%は有益に使える。そういう面が必ずありますので、これから国民の側が科学者に対して放射能の無害化と放射能の有効利用を研究してくれ、と。そして人類を放射能の不安から救うという研究をしてくれと要求しなければなりません。今、ノーベル賞をもらっても8000万とか9000万ぐらいなんですよね。ところが、野球選手の大リーグの契約金と言ったら何十億だとか。またサッカー選手も何億ももらっているなどを聞くと、学問的研究に対して支払われる報酬が少ないと思うわけです。今回も山中先生はiPS細胞の研究をして、ノーベル賞を貰われましたけど、もう一人のドイツの学者と半分ずつとなったそうです。約4000万円ぐらいしか貰えない。非常に寂しい限りの報奨金であります。そういうことではなく、放射能の無害化と有効利用で研究成果を出せば、50億円！という報奨金を払うから研究をして欲しい、とやれば皆こぞって研究をし始めると思うんですよ。だけどまだ世界には放射能の無害化と有効利用を研究するというテーマがないんですね。それを国民の方から提案をして、科学者に要請をして全世界が充分な報奨金を用意すれば、どんどん出てくると思うんですよね。それほどの報奨金を出してでも解決して乗り越えていくべき重要な課題だと思うわけであります。**

**前向きに原子力発電を安全に使えるような研究をしなければならないのかの学問的な根拠は？核エネルギーを使えるようになった原理をつくったのは、アインシュタインです。質量をエネルギーに転換できるという根源的な法則を発見しました。その結果として原子爆弾もつくられ、原子力発電もつくられるようになった。核エネルギーを開発するようになった能力は、人間に生まれながらに与えられている潜在能力が出てきたということ。人間の持っている能力というのは、すべて命から湧いてくるもの。突然天から降ってくるものではない。問題によって生まれながらに持っている潜在能力が引き出される。そういうことを考えるならば、核エネルギーを開発したアインシュタインの考え方も彼がつくったというよりは命の中に潜在する能力が出てきた結果と考えることができます。この力を人間に与えたのは、命をつくった母なる宇宙の摂理の力によって潜在能力、あらゆる生物の遺伝子はつくられたわけです。宇宙の力によって与えられた能力が潜在能力である。それが出てきていろんなことができるという力を持って、今日まで歴史をつくり発展してきたわけであります。そういうことからするならば、人間に遺伝子・潜在能力を与えた宇宙からするならば、その力が出てきて原子爆弾もつくられ、原子力発電もつくられた…だから、宇宙からすれば人類はやがて核エネルギーを使うことになるであろうと考えるのは当然で規定の道。生まれて物事を起こし解決して死んでいく流れのなかでは、宇宙からすれば当然・規定の道を進んでるということ。**

**そういうことからするならば、我々は与えられた能力を否定するのではなく、活かしきって生きていくことが人間として正しい生き方です。与えられた能力を否定するのは、宇宙の意志に逆らう反逆、謀反と同じである。活かしきって生きていく以外に人間としての生き方はないんだ。潜在能力というのは人類が成長していくことに与えられたものだから、どう活かして使うかが人間に課せられた課題だと言えます。核エネルギーも同様に、決して否定して使わないようにするのではなく、どういう風に使ったら有効に使えるかを考えることが、人類の知恵なんだと考えていかなければならないと思います。であるがゆえに核エネルギーを有効に人類のためになるように使えるか、ということを考えていく。そのためにはどうしても放射能の不安というのを乗り越えていかなければならない。原発の事故に恐れるのではなく、怯むのではなく、問題から逃げるのではなく立ち向かっていって、将来は原子力発電を有効に安全に使える考えで努力していかなければならないと思います。**

**とにかく、今のところは我々の持っている力ではなんとも対応し難い恐ろしいものと言えますが、それは、もっと高度な新しい力を命から湧出させるために出てきている問題です。そのように考えて、とにかく我々は問題から逃げるのではなく立ち向かっていって、そして今はない新しい力を命から引っ張り出して、将来核エネルギーを支配して有効に使えるという状況にしていく、その研究をこれから進めていかなきゃなりません。だけども人間は不完全ですから、どんなことも絶対に安全だということはありえないですよ。またよく想定外はいかんということで、想定外を想定してやらないかんとか言ってますけど、何かすれば必ずその意味では想定外は出てくるわけで、人間は不完全ですから必ず想定外のことが起こるんですよね。大事なことは、想定外のことが起こったときにどう対処したら良いのかということがわかって、初めていろいろなことが使えるようになってくるということ。**

**薬なんかでももし副作用が起こったらどうしたらいいのか、それをわかってからしか薬は安全に使えないというのが常識です。だから、その意味においては放射能の問題ももし放射能の事故が起こり、問題が出てきたとき、どうしたら最小限の被害で食い止めて問題を乗り越えられるかがわかってからしか核エネルギーは使えない、と考えるのが常識だと思います。そういうことからするならば、当面はどうしたら良いかわからないという状況ですから、停止・休止するのが正しいと思います。だけども、だんだんと原子力発電はなくしていこうという風に持っていってしまうのではなく、当面は稼働してはならないけども、できるだけ早く放射能の無害化と有効利用の研究をすることによって、事故が起こってもそう大したことはないという状態に持っていく努力をすることが、核エネルギーを使う能力を与えられた人類においては、正しい対処方法ではないかと。宇宙から与えられたエネルギーを活かして使っていくという観点からは、それが正しい問題に対する対処方法ではないか、という風に考えなければならないんじゃないかと思われます。とはいっても皆さん方からすれば、そんなこと言ったって放射能を無害化できなくて、有効利用をどれだけ考えてもできなければ、どうしてくれるのかということですよね。そういう問題も出てくるんじゃないかと思うんですけどもね。だけども我々が人生を生きる上で持っていなければならない信念は、どんな問題でも答えがある。だからどんな問題でも答えが出るまで努力をやめないという生き方をしないと、人生に成功はない。これが感性論哲学の基本的な人生を生きる信念であります。**

**なぜどんな問題でも答えがあると言えるのか。それは、問題は潜在能力を引き出すために出てくるもの。今我々が持っている力でなんともならんという問題は、人智を超えた天の計らいによって人間を成長させるために、天が、宇宙が、世界が人間に与えるもの。問題は潜在能力を引き出すために出てくるもの、それはつまり潜在能力は生まれながらに母なる宇宙から、天から人間の命に与えられている遺伝子なんだ。ということは、問題も母なる宇宙が人間を成長させるために与えてくれる。答えも生まれながらに母なる宇宙から与えられている。そして、問題はその答えを引っ張り出すために出てくる。この構造を考えるならば、問題というのはどんなものでも答えがある。問題が出てくる以前から答えはあるんだ。問題と答えはつるんじゃっている。どんな問題でも答えがあるんだから、答えが出るまで諦めてはいけない、成功するまでやり続ける…それが唯一人間が成功と幸せを手に入れる生き方の原理だと考えなければなりません。仕事の上でも忘れてはならない重要な生き方の原則なんですよ。問題というのはどんなものでも答えがある。答えのない問題はない。問題が出てくる以前から答えはあるんだ。諦めなければ全部乗り越えられるんだと、そういう信念を持ってどんな問題でもぶつかっていかなければなりません。そのことによって我々は新しい時代を呼び起こし、新しい時代・歴史をつくる。そういう仕事ができるようになるわけであります。どんな問題でも答えがある…これは非常に大事な人生を生きる力をつくっていくための基本原理であります。**

**だけども人間は不完全ですから、どんな問題でも答えがある、解決できるとは言え、ひとりの人間では限りがあります。そこで考えなければならないことは、仏教で言われている言葉ですけど、「三人寄れば文殊の知恵」。ひとりでは解けない難問も三人の力を合わせれば、仏の知恵に近づくことができるという考え。自分の力だけでは限界があるけど、三人の力を合わせたら仏の知恵、文殊の知恵に近づく回答が出てくる。母なる宇宙から与えられた潜在能力を引き出すことができるへと繋がっていきます。そういう理解の仕方です。なぜ三人寄れば…ということになるのか。これは現実の社会というのは、一人称二人称三人称という構造で成り立っています。つまり、生きた現実というものをちゃんと正確につかもうと思ったならば、自分の目から見ただけでは偏ってる、相手の目だけでも偏っている、第三者の目から見ただけでも偏っている。三つの目を統合することによって、生きた現実を正確につかめることになるんだ、というのが「三人寄れば文殊の知恵」という言葉の背景にある根拠であります。現実は一人称二人称三人称という構造で成り立っており、一人称二人称三人称というのは全部これはある意味で立場がありますから。皆それぞれ限界はある。だけど三つのものを統合することによって、初めて生きた現実が正確に出てくる状態に近づいてゆくことができるということですね。だから自分一人の力で全部やってしまわないかんと思う必要はない。どんなことでも三人の力でできるだけ完璧に近い仕事に近づけていく。そういうことを考えるのが、勝ち負けを争うよりも力を合わせれば共に成長できて、そして素晴らしい生き方ができるという原理であります。「三人寄れば文殊の知恵」。**

**よく科学的真理は正しいと思っている人が多いんですけど、これは物事を客観的に見て研究して出てくるのが科学的真理というものなんですよね。その科学的真理で物事を客観的に見て出てくる真理ですから、それには客観的な歪みがあるんですよ。このことをあまり言わないで、科学者が言うことは全部正しいと思ってしまっている。だけど学問は進歩する。昨日まで真理だと言われていたことが今日は嘘になってしまう、それが学問だ。なぜ昨日まであったものが嘘になって今日には新しい真理が出てくるのか。それは客観的にものを見るということは、客観的に歪めて理解するということになってくるんだ。だから現実的に科学的真理と言われる考え方によって自然に対応すると自然破壊が起こる。科学で自然に対応すると自然破壊が起こる。自然というのは決して科学で客観的に見られたような、そういう状態になっていない。人間の命もひとつの自然ですけどね。人間の命ももちろん理性もあるけど感性も肉体もある。感性と肉体は理屈を超えた世界だから、理屈だけで物事を考えて出した答えによって命に対応すれば、命は壊される・破壊される。これが自然破壊が出てくる根拠であります。ということは、我々が理性的にものを見るということは理性的に歪めているんだ。合理的にものを処理するということは合理的に歪めているんだ。こういうことも今はよく考えなければならない大事な問題なんですね。**

**自分の立場からものを見るということも主観的に歪んでいる。相手の立場からものを見るということも客体的に歪んでいる。第三者的な立場からものを見るということも客観的に歪んでいる。皆それぞれ歪んでいる。これを偏見といいます。偏見というのは間違った考えではないんだ。正しいんだけど偏っているんだ。自分の考えは主観的に偏っているんだ。自分の立場からものを見たら「そう見える」というのは正しいんだけど、それはそれで正しいんだけど、偏っているんだ。完全ではないんだ。相手の立場から見たら「こう見える」というのは、それも正しいんだけど、偏りがあるんだ。第三者の立場からも同様。全部偏っている。だけど、その偏ったそれぞれの三つの考え方を寄せ合って統合してガッチャマンすれば、段々と生きた現実に近づける、真実に近づける。そういう答えが出てくるというのが、「三人寄れば文殊の知恵」という言葉なんですよ。とにかく皆と一緒に仕事をしていくという社会の中で、よく考えておかなければならないことは、どんな立派な人間でも偏見がある。「俺の考えは絶対正しい」と思っていても、それも偏見なんですよ。それはどういうことかと言うと、人間には肉体がありますよね。つまり、どんな立派な人間でも自分の肉体のある場所からしかものは見えないんですよ。今自分の肉体のある場所でしか考えられないんですよ。今自分の肉体のある場所でしか判断ができないんですよ。どんな立派な人間でも肉体がある限りは、肉体によって限定された有限性がある。どんな立派な人間の意見でも全部偏見なんですよ。**

**今、私が申し上げていることも偏見なんですよ、私の意見ですから。偏見というのは間違っているのではない、正しいんだけど偏っている。私の考えは感性というものを原理にしたら、このように考えることができますよという偏りがある。理性を原理にした答えと、肉体を原理にした答え、感性を原理にした答えでは、回答が違うわけです。であるがゆえに私が申し上げている答えも偏りがある、偏見なんだ。だけど、なぜこの感性論哲学というものが必要なのかと言ったら、時代そのものが理性の時代が終わって感性の時代に入ろうとしている。これまでは理性を原理にして発展してきた。けれど、これからは感性を原理にして発展していく時代に入るんだ。すべての人が理屈ではない、心が欲しいと叫んでいるんだ。人間観自体が、人間の本質は理性だという時代から心だという時代に変わってきている。そういう心の時代、心は感性ですから。心の時代をこれから生きていかなければならない我々にとっては、理性の哲学は要らないわけだ。これから我々が最も大事にしていかなければならないのは心だ、感性だ。そういう意味でこれから何百年は感性論哲学があらゆる考え方の原理になってくる。だけど、時代が変われば哲学も変わる。やがて感性論哲学も御用済みとなる。役割が終われば新しい哲学が出てくる。そういう時代が必ずやってくるわけですよ。これは避けがたい宿命なんだ。けれど、今から何百年は心の時代だから、理性よりも心を大事にする。理性よりも本音や実感や欲求を大事にする、感性の時代に入っていく。これからは感性論哲学を原理にしていろんなことに対応していかなければならない、そういう流れなんですね。とは言え、感性論哲学も偏見なんだ。当然、感性論哲学とは違う考え方もできるんですよね。でも、時代が流れているから、感性を原理にした感性論哲学がこれからは有用だ、役に立つと言えます。とにかく、どんな立派な人間も肉体がある限りは、肉体によって限定された有限性がある。偏見がある。**

**本当に正しい考え方に近づいていこうと思ったのなら、自分の考え方も正しいんだけど偏っている。その偏りをできるだけ修正しようと思ったら、自分の考え方とは違うあと二つの考え方を探し出してきて、そして自分の考え方とガッチャマンして統合して、最終的にどういう風に決めるかと判断する。これがこれからの時代を生きる人間の謙虚な物事に対する対応の仕方、謙虚な理性の使い方となるわけであります。これまでは、自分が正しいと思ったらその道を貫くのが信念があり立派だと言われていたんですけど、これからは違うんだ。これからは個性の時代、いろんな考え方がある。それが認められる時代ですから、だから必ず自分一人の考え方ではやらない。自分一人の考え方では偏っているということを常に自分の頭において、必ず自分とは違うあと二人の考え方を探し出してきて、そして自分の考え方と統合し、三つの考え方を寄せ集めて自分の最終的な結論を出す。そういうやり方で物事を処理していかなければならない。これがこれからの理性の使い方、あるいは問題に対する対処の仕方、答えの出し方となってくるわけです。これまでは偏見はいかんと言われ、偏見を持ったらいかんと言われ、偏見は間違っているんだと思っている方が多いんですよ。偏見は偏りがあるだけであって間違ってはいない。その人なりの正しい。だけど、ものの見方において偏りがあるだけ。偏見があるのは恥ずかしくない、当然なんだ。だけど偏りがあるんだから、偏りのない考え方に持っていこうと思ったらならば、必ず自分とは違うあと二つの考え方を無理矢理にでも探し出してきて、そして自分の考え方と統合して結びつけて、最終的に自分の判断がどうなるかを決める。これが謙虚な理性の使い方、人間的な判断の仕方と言うことができるわけです。**

**これまでは理性をちゃんと正しく使えば、誰もがそうだと認めることができるような正しい判断に到達できる、と言われてきました。ですのでついつい自分の考えに固執して、他の考えと対立して自分の考えの正しさを主張するということになってきたんですけど。今は理性という能力は決してそんなに完全な正しさを持っているものではないということが分かってきております。だから、これからは理性という能力は合理的にしか考えることができない有限で不完全なものなんだ。理性も不完全なんだということを我々は知って使わなければならない時代にこれからは入る。理性は決して完全無欠のロックンローラーではないんだ。しかし、不完全というのは完全ではないということであって、間違ってはいない。理性的には正しいんだ。だけど、理性的に正しいということは理性的に歪めてしまう。あらゆるものを合理的に歪めてしまう。だから理性的な判断には偏りがある、偏見があるんだ。なぜそういう風に言えるのか。なぜなら人間はイコール理性ではない。人間は理性もあるけど、感性もあるし肉体もある。感性と肉体は理屈を超えた世界だ。だから理性だけで人間の問題に対処すれば、それは人間を歪めてしまう。歪んだ物事の解決の仕方をしてしまうことになる。そういう理性には理性的な偏りがある。だからその偏りを修正しようと思ったら、自分の考えと違うあと二つの考え方を持ってきて、三つの考え方を結びつけて最終的な判断をする。そのことによってできるだけ偏りのない真実に近い判断ができる。ぜひ会社の中のいろんな問題を処理する場合でも、これからの時代の理性の使い方というものをよく理解しながら、自分の考えだけでことを推し進めてしまうということのないように注意しなければなりません。ということで4時半になりましたので休憩に入ります。どうもありがとうございました。**

**それでは後半の話に入ります。**

**次は、今深刻な問題になっている、イジメという問題です。とにかく新しい時代をつくるということをするためには今目の前にある問題を解決して乗り越えていかないと、新しい時代はつくれません。そういう意味でイジメの問題も、これからの時代を生きていくためにどういう風にこういう問題を解決していけば、今よりもより素晴らしい生き方ができる人間に自分が成長していけるか、ということ考える上で大事な課題になってくるわけであります。イジメというのは、今は学校のイジメだけが問題になっておりますけど、イジメというのはどこの世界でもあること。家庭内イジメというのがあったり。奥様にご主人がイジメられていたり、ご主人によって奥様がイジメられていたり…これはドメスティックバイオレンス（DV）ですが。また、親が子をイジメる…これは幼児虐待というのもあります。子どもたちがお父さんお母さんをイジメる…高齢者への虐待、親をいびる・イジメる。また会社なんかにおいてはパワーハラスメントと言って、権力や立場を笠に着て部下を必要以上に叱る。あるいは仕事において追い詰めてしまう、というイジメが今はあります。そういう意味でイジメという現象は、どこに行ってもあるわけです。よく昔は嫁いびりと言って、姑さんがお嫁さんを教育しようという気持ちでしていたことが、お嫁さんからすれば嫁いびりという形でイジメられているという感覚を持ってしまっていた。そういうイジメという現象は、人間の能力の違いなどいろいろなことから起こります。どういう世界でもどうしても自分と合わないとか、相手が邪魔だとか言うことを聞かないとか、いろいろとあります。イジメという言葉にならないような状況でも悪ふざけという感じで友達とふざけ合うという状況の中から、だんだんとイジメという状況に進んでいってしまう。こういうことは会社の中でもあるんですね。悪ふざけをしている人は、別にイジメているという感覚はないんですよね。だけど、されている方はたまらんわけです。死にたいような気分になっている…けれどもそれをなかなか口に出せない。とは言え、我慢しなければならない状況でついつい悪ふざけがひどくなって、イジメという現象になってしまう。**

**とにかく、学校においてはイジメによって最終的には自殺をする、しなければならないところまで追い詰められて、事件として明るみに出ている子どもがたくさん出てきています。そういうことから文科省においても県や市町村においても、イジメ対策室を設けて全国の学校でどのようなイジメがあるのかを調べ始めたら、全部の学校になんらかのイジメに近いものがあるということがわかってきているわけですよね。これをどのように処理していったら良いのか。これが非常に深刻な問題で、子どもを持つ親ならば誰もが自分の子どももイジメられているのではないか、と心配になっている状況に置かれております。だけど、なかなか子どもがイジメられていても、イジメられていると言わないんですよね。またイジメられている子もイジメられていると思っていなくて、遊びの中で損をさせられている、弱い立場になってしまっていて、自分でも嫌だな情けないと思っていても友達だから付き合っている…という感じでいる子もいるわけです。子どもというのはなかなかそういう状況にいても人に相談をしないんですよ。イジメられていても親に相談しない、先生に相談しない。また友達にもなかなかそういうことは言えない。だけど、イジメられている子は自分としては早く誰か気付いてくれないかな、早く誰か助けてくれないかな、誰か手を出して救ってくれないかなと強烈に思っているわけです。だけど、その子自身は助けてもらいたいと思っていても、命が人に相談するという行動を止めてしまう。なぜかと言うと、命というものは問題は自分で乗り越えて解決しないと実力にならんと考えている・思っているものだから。よく登校拒否・不登校とか出社拒否とかに現れてきます。子ども本人は、学校にいかなくちゃと思っているんですよね。だけど、そう思っていても急に頭が痛くなったり、お腹が痛くなったりする。何か体の具合が悪くなってしまう。その子は行こうと思っていても命が止めるんです。「学校に行ってはいけない」と。出社拒否も登校拒否と同じで、会社に行かなくちゃとは思うけれども行こうと思うとどこか具合が悪くなってしまう。そして、会社を休んでしまう。具合が悪くなってしまうので病院に行っても、どこも悪くない。結局それはストレスなどからくる心の病、そういうものが原因だと言われて、心療内科なんかではそのように判断する。とにかく、イジメられている子というのは、親が「イジメられているの？」「どうかしたの？」と聞いても「なんでもない」と言うんですよ。そういうイジメられている子の心の状態、心理というのもちゃんと理解していないといけません。**

**今はイジメている子が悪いという判断で、イジメている子をどう処分するか、イジメをどうなくすかということしか考えていないんですけども、イジメという現象をよく深く考えてみると、実は友達をイジメている子もある意味で犠牲者なんです。またイジメられている子も犠牲者なんです。これはどういうことなのかと言うと、イジメという問題が出てくる10年ほど前には校内暴力や家庭内暴力が問題になったことがありました。そのときに心理学者の先生方はどういうことをおっしゃっていたかと言ったら、校内暴力というのは家庭における愛情の欠如である。親の愛が不足していて子どもが愛に飢えているという状態で寂しい、あるいはむしゃくしゃする、イライラする気分を学校で教師を殴ったり、学校の窓を割ったり、器物損壊あるいは万引きでスリルを味わう、暴走してスカッとする。そういうところへはけ口を求めていく。そういうのは愛情の欠如による行動だと言われたわけです。**

**家庭内暴力というのは、愛情の過多。あまりにも愛情が行き過ぎていて、お父さんお母さんがあまりにも細かいことで子どものことを構いすぎて、結果として煩わしくなり、程度を超えていることから子どもがイライラした気持ちになる。カーっとなって金属バットで親を殴り殺していた…ということもあります。今回のイジメと言われる問題もそれに近い原因があるわけです。心が愛で満たされていれば、人をイジメる行動は出てきません。何かしら不満があって、ストレスがあって何かむしゃくしゃする・イライラした気持ちというのがイジメる子の原因なんです。イジメる子は心が満たされていない。心に何かしら満たされていないものがある。特にお父さんお母さんから充分な愛が与えられていない。両親としては子どものことをいろいろと考えてやっていると思っていたんだけど、子どもからしたら「お父さんお母さんは全然俺のことなんかわかっていない」という感じなんですよね。子どもが求めている愛と親が子どもに与える愛とがすれ違ってしまっている。「全然、俺の気持ちなんかわかっていない！」と。そういうことになって、なんかイライラする…という気持ちになってしまうんですね。**

**そういうイライラした気持ちが学校に行って、弱い・おとなしい子に向かってしまう。そのストレスを発散する。イライラをぶつけるということになっていって、現象としてはただ悪ふざけみたいな感じなんですよね、最初は。だからその悪ふざけの段階で、もし相手の子が抵抗をして反抗をすれば、イジメにはならないで終わってしまうんですよ。だけど、イジメられっ子というのは反抗しないんですね。そんななすがままにしておくと、されるだけされてしまってどんどんどんどん反抗しないから、悪ふざけが過ぎて陰湿化し、イジメがひどくなっていくというのが自殺という問題が起こる原因なわけです。ところがイジメられっ子というのも実は家庭に問題があるんですよ。イジメられっ子も親がつくってしまうんです。イジメっ子もイジメられっ子も家庭に問題があるんです。イジメられっ子もね、実は親の責任なんですよ。**

**どういうことなのかと言ったら子どもというのは本来、第一反抗期・第二反抗期という反抗をしながら成長していく。反抗することによって自分をつくっていくという成長の仕方をちゃんと命にプログラミングされて生まれてくる。子どもは反抗しないと自分というのがつくれない。「俺はそんなことしたくない」と言って、自分がはっきり自覚できるんですよね。「先生がそうだと言っても、俺はそう思わない」と言って自分の考えがはっきりしてくるんですね。反抗することによって子どもというのは、自分自身を形づくっていって、自分をつくっていく。そういう生き方をするのが健全な健康な命の姿なんですよ。教育から言うと、教育というのは反抗を恐れては教育ができない。反抗というものを利用して、反抗させることによって「この子はこういう考えを持っているんだ」「その子はこういう価値観を持っている」「この子はこういう気持ちなんだ」ということを反抗を通してわかってあげて、それを理解しながらその子どもに接してあげて、その子の考えや欲求を実現させてあげるように関わってあげる。というのが本当の教育というものの姿であります。反抗させないということは、支配なんだ。反抗させることによってその子をわかってあげる。反抗を恐れないという姿勢は、会社の経営でもそうです。社員の反抗を恐れないという姿勢がなかったら、本当の社員教育はできません。そうでないと、その人の力を発揮させて、活躍させるという社員をつくることはできません。反抗させないとその子の力は出てこない。ついつい会社は教えて、教えた通りにさせようとしてしまい、教えすぎてしまう。その人の力を抑えてしまう。機械のごとく使ってしまいやすい。だけど本当は会社においても、自分の意見を素直に言える環境をつくってあげる。そして自分を表現することによって上司は、その人の能力や性格や気持ちをちゃんとわかってあげて、そしてその人は快く働けるようになる。またその人が自分の力を発揮して会社に貢献できるような道をつくってあげる。そして働いてもらうのが上司、リーダーの仕事であります。とにかく子ども、人間というのは反抗することによって自分でちゃんとつくっていく。反抗することを通して自分というものをちゃんと刻んでいく。反抗することによって自己実現を達成していく。そういう命として生まれてくるんですよ。**

**子どもは皆反抗というものを生き方として基本的に持っているのが健全な命の姿であります。だけど、子どもはお父さんお母さんが好きなんですよ。子どもは生まれたときには一点の曇りもない、絶対的信頼を持って生まれてくる。お父さんお母さんを信じ切って生まれてくるんですよ。子どもはお父さんお母さんに逆らいたくない。お父さんお母さんが好きだから、嫌われたくない。悲しませたくない。困らせたくない。そういう気持ちが子どもにあるんですよ。ですから本当は反抗することが命の自然な姿なんだけど、だけどお父さんお母さんを困らせたくない、嫌われたくないという気分もあるもんですから、ついついお父さんお母さんの言うことに従ってしまって、反抗しないで自分を抑えるという生き方を子どもはしてしまいやすい。そういうことになってしまう子どもは約50%いるわけです。50%は反抗しないで言うことに従う素直で従順な子が家庭の中でつくられていくわけです。そういう状態を親は子どもを褒めて喜ぶわけですけど、それによってますます子どもは親の言うことに従って反抗しない。それが続くと自分を抑えて反抗しないで従順で素直に従うという性格、生き様がつくられていく。だけど、反抗しないのはその子自身が望んでいるわけではない。親にとって都合の良い子になってしまう。親は反抗しない子を自分にとって都合が良いから褒めるわけです。ここは非常に大事、親が子に対する気持ちとして反省しなければならないこと。**

**親は反抗されると困る。できたら反抗してほしくない。親は反抗しない子を自分にとって都合が良いから。でも、その子自身は望んでいない、反抗するのが自然の姿だから。親が褒めてくれるから、喜んでくれるから、自分を抑え込んで我慢する。約半分がそういうおとなしい子がつくられていってしまう。そういう子が学校に来る。片一方は親に不満を持ってイライラして、満たされない心を持って不満とやり切れなさを持っている。ついついおとなしい子にぶつけてしまう。そして、イジメられた子は我慢することに慣れている。そして、反抗しない。イジメられているのにヘラヘラ笑っていたりするんですよ。遊んでるみたいな感じなんですね。だけど、反抗しないから段々悪ふざけが過ぎてついにはイジメという形になっていく。イジメられている子がかわいそうだと思って助けようとする子もいるんですけど、イジメられている子を助けようとすると、助けようとした子がまたイジメの対象になってしまう。だからそのイジメられてかわいそうだと思って助けようと思うんだけど、そうする自分がイジメの対象になってくるから、しょうがないからイジメている子に味方するんですよ。どんどんどんどんそのイジメている子のグループが増えてきて、そしてイジメられている子はどんどん孤立化し、皆からイジメられるという状況になっていってしまう。イジメられていても誰も助けてくれない。誰もそういうことを先生に言ったりしない。チクると今度は自分がイジメられてしまうかも…となって、放ったらかしなんですね。そういう状態でどんどんどんどん逃げようのないところまで追い詰められてしまって、「もう死ぬしかない」という状態で死んじゃう。そうなっているのに、その子は親にも相談しないんですよ。もちろん先生にも相談しない。**

**そういう状態になってくると、さすがに親でも「なんかおかしいな」と思うわけですよね。問い詰めてもなかなかイジメられていると告白はしないんですよ。「なんでもない」と言うんですよね。なんかおかしいと思って先生に言っても、イジメはあったらいかんと思っている。だから、イジメがあるとなると自分の責任が問われますので、イジメがあってもあるとは言えない。イジメを見て見ぬふりをして、悪ふざけという判断で通り過ぎてしまう。校長先生もわが校にイジメがあったら自分の学校運営がなっていないと言われてしまう。そして、イジメはあったらいかんとも思っているので、イジメを認めない。イジメがあるとは絶対に言わない。警察に言っても、事件が起こらないと動けない・動かないところ。だから、それまでは「個人的に注意してください」と言われてしまう。これはストーカーにおいてもそうですね。このようにどこにいっても取り上げてくれない。そうこうしている間に子どもは我慢しきれなくなって首をつって死んでしまう。とにかく、イジメている子も親の愛の在り方に間違いがあって親の犠牲者なんだ。またイジメられている子も親の身勝手な愛の在り方において、そういう子に親がつくってしまった。そういう状態でクラスの中に入ってくると、どうしてもイライラした気持ちをおとなしい子にぶつけてしまう。そういうところからイジメは始まってしまう。程度の差こそあれ、常にあるんですよ。本当にこの問題を学校でちゃんと解決していこうと思ったら、イジメはあったらいかんということではなくて、イジメは常にあるんだ。だから立派な先生というのはイジメを早く発見して、そしてそれを未然に防ぐということが仕事なので、早く発見することが立派なんだという風に考えてあげないといけない。イジメがあったら先生の教室管理がなっていない、ということで先生を責めていたら先生はイジメを隠すんですよ。**

**会社でも社長さんが問題が出てくることを嫌えば、あるいは社長さんが問題が出てきたときに「誰がこんなことをしたんだ」と、すぐに犯人探しをするような会社だと、社員は問題があっても隠すんですよ。問題があっても言わない。なぜなら自分が責められるから。人間は不完全だから、いつでも問題はあるんだ。問題があっていいんだ。問題をちゃんと口に出して言うことが立派な社員なんだ。問題を隠す社員はダメなんだ。問題をちゃんと掴むことが立派なんだ。常に問題はあるんだから、問題がないというのは真剣に働いてない証拠。失敗するのも当然なんだ。失敗した→問題が出てきました…ということが立派なんだ。問題はない→失敗していないというのは嘘を言っていること。それは自分というもののダメなところを認めない。自分をわかってないということ。そう考えていかないと社員がついつい問題を隠す、嘘を言うようになる。**

**学校のイジメの問題でもイジメというのはどこにでもある。それが自然なんだ。早くイジメの端緒、いわゆる悪ふざけを発見して、ひどくなっていかないよう直していく。それが立派な先生なんだという風に評価してあげないといけない。イジメがあるようではいかんという方針・考えでは、現場の先生は「自分のクラスには問題はありません」と言ってしまって隠してしまう。または見て見ぬふりをしてしまう。まずは、イジメの問題は家庭にもある、職場にもある、どこにでもあるもので、必ずあるものなんだと知ること。早く発見して対処することが大事な正しいやり方なんだ。イジメがあると発見することが立派な先生なんだ。イジメがないというのは現実が見えていない、ダメな先生。そのように考えていかないとイジメが陰湿化していくことを防ぐことはできません。**

**とは言え、今のところはそのようになっていないんですね。まだまだイジメはあってはならないと考えて、イジメている子を処罰しようとしている。まだまだイジメの温床は断ち切れません。しかも、イジメている子だけが悪いという考えで、イジメている子の両親の責任はまったく問うていない。そういうことを問題にしていない。またイジメられている子の両親の責任も問うていない。子どもだけを問題にしている。イジメられている子も親による犠牲者ですから、そういう意味では子どもだけを問題にするというのは、かわいそうなことです。暴走族の子たちに対応するときに「暴走はいけない」とやめさせようとすると、かえって火に油を注ぐ形になって、ますます暴れるんです。では、どうしたら一体暴走族の子たちを救うことができるのか。「なぜ、キミたちはそのようなことをする気持ちになってしまったのか」と。「原因はなんなんだ」と聞いてあげる。そうすると、「実は家に帰ると親が喧嘩をしていて」とか「親に虐待されて…」「ガミガミうるさくてやりきれない」とか。「ついついむしゃくしゃして暴走したくなる」など、原因は必ずあり、それは必ず家にある。原因を聞くと「それはそういうこともしたくなる」と返し、「気持ちはわかる」と共感してあげる。そうすると理解してくれる人が出てきたと、ようやく気持ちが落ち着いてその人の言うことだけは聞こうという気持ちになってくる。暴走や万引きそのものをやめさせようとするだけでは、かえって火に油を注ぐことになってしまう。そうすると、ますます行動が陰湿化・悪質化してしまう可能性がある。**

**子どもは皆わかってもらいたいんですよ。わかってもらいたい、認めてもらいたい、褒めてもらいたい、愛されたいんですよ。そう思っているのに言われることは、否定的な非難・忠告ばかり。まったく愛ある言葉が貰えない。ますます火に油を注ぐことになってしまう。「もう俺なんてどうでもいい」「心配してくれる人なんていない」とエスカレートしていくと、人を殺すことが楽しみになってしまったり、異常な状態までいってしまう。とにかくぜひこういう問題から、ご自身の家庭での子どもに対する接し方を考えてみてもらいたいと思います。イジメられている子もイジメている子も親の犠牲者。小遣いだけ与えてあとは自由放任…あとは何も構わない。そういう状態でうっかりしていると子どもが暴走族になっていたり、非行に走ってしまう。けれども、親はそれを親の責任だとは感じていない。友達が悪い、学校が悪い、どんな教育をしてくれているんだとなる。本来親に責任があるところに全然責任を感じていないで、学校を責めたり、あるいは友達を責めたりとなってしまっている。子どもが従順で素直なことは異常なこと。間違った親の在り方をしていると全然考えていない。子どもが従順で素直なことは親にとって都合が良いから、いい子だと思っている。結果として自分の意見も言わない、自分の欲求もない、何をしていいかわからない…そういう自分がない子を家庭の中でつくってしまう。めちゃくちゃな反抗はしなくても良いが、自分の意見や気持ちを親に言える雰囲気を家庭においてもちゃんとつくってあげないといけない。そうでなく、反抗もせずに従順に素直に言うことを聞いているだけでは、親の教育ではありません、支配です。奴隷的に子どもを扱っているということになる。そういう意味でももっと学校の問題からして親の在り方を考えてみてもらいたいと思います。**

**現実にイジメという状況が出てきた場合、どうしたら良いか。学校に行っても問題にされない、警察に行っても問題にされない…ではどうしたら良いか。本当に子どもの命を救いたいと思ったら、打つ手はひとつしかない。信頼できる私立探偵に頼んで、子どもの一日の行動を跡をつけてもらって、ちゃんと調べてもらう。もしイジメられている状況があったら、それを証拠写真としてちゃんとつくってもらって、証拠写真を持って学校や警察に行って、「こういう状況なんだ」ということを説明する。それぐらいの努力を親がしないと、今の時代は自分の子どもを救うことはできない。それほどまでに努力をして、子どもを救ってあげることを子どもは期待しているんですよ。「誰か助けてくれないかな」と子どもは思っているんですから。自殺する子は死ぬまで親を信じられないんですよ。「全然気が付いてくれない」「俺のことをわかってくれない」と絶望的になって死んでしまうんです。それもひどくなる前でもそうすることで救ってあげることをしなければなりません。とにかくイジメの問題は学校だけでなく、会社の組織においてもパワハラという形で、必ずあるんですよ。**

**ついつい上司は部下のすることは、なんか頼りないという気持ちになって部下に厳しくあたることがあります。上司としては部下が頼りないのは当たり前なんですよ。誰でも新入社員のころは何もできなかったんだ。上司にいろいろ教えてもらって、だんだんだんだんできるようになっていくというのは会社という組織の在り方ですから。いくら上司といっても、その立場を重ねて部下を責めるというのは、あまりにもやっぱり人間として醜い心根と言わざるを得ません。もっともっと部下に対して愛を持って、育てようという気持ちにならないと上司とは言えないですよね。そのためにも人間というのはどんな人でも短所は半分はある、長所も半分ある。短所を見たら責めざるを得ないし、もう嫌になっちゃう。とにかく、どんな人でも短所はあって、半分もあってなくならないんだ。それをなくさせようとするような、間違った努力をさせてはならない。伸びる長所を発見してあげて、伸ばしてあげて、会社の仕事で使ってあげる。その配慮が組織においては必要であります。どんな人にでも短所は半分、長所は半分。どんな人にも他人にはない、いいところがある。それを早く見つけてあげて、それをどう会社の仕事で使ってあげるか、それが上司の最も大事な仕事なんだ。**

**学校の教育でもそうですが、小学校に入って3〜4年生ぐらいまでの教育というのは、絶対に子どもに挫折感を味わわせてはならない。会社に入っても1〜3年ぐらいまでは絶対に挫折感を味わわせないで、達成感の感動を積み重ねることが、その仕事を好きになり、またその仕事を一生やっていこうと思う気持ちにさせていく。それが大事な育て方になります。大体その小学校でも4年生ぐらいで挫折してしまうともう全然勉強についていけなくなってしまって、そういう子が総じて非行に走りやすいんですよね。学校は面白くないから。学校でも職場でも一緒で、入ってから3年ぐらいの間は絶対挫折感を味わわせない。とにかくは何でもちゃんと上司が手取り足取り教えてあげて、「やった！わかった！できた！」という感動を積み重ねていくという教育体制を会社でもつくっていかないと、ついつい厳しさに負けてしまって、「もう仕事へ行くの嫌だ」となってしまって会社に出てこなくなったり、辞めてしまう。**

**今は非常にその転職も考えて、今ある会社に不満を持って違う会社に行ったり、また自分の仕事を始めたりという方もいらっしゃるんですけど。だけど今の経済状況の中でどんなことが言われてるかと言うと、新しく仕事を始めた人の93%は3年以内に倒産すると言われています。その会社をつくってから3年以上続く会社というのは100ある会社の中の7%しかないって言うんですよ。それが現実なんだ。そんな甘い汁はそう転がっていない。そういう意味においても、10年20年30年続いた会社で仕事ができるということは、非常に自分の一生の仕事として安心して働ける。そういう会社であると言わなければなりません。ほとんどの会社は3年以内に利益を出せないでつぶれてしまう。こうしたら儲かるとか、いろいろそういう誘惑が多くあるのもまた現実ですけど、そんなに甘いことは絶対ないですよね。競争ですから、お互いに。最初はうまくいって儲かるような感じになっていても、結局うまくいきかければ同じような仕事をしている人たちとの競争に入ってしまいますから。結局相手につぶされてしまうか、相手に仕事を奪われてしまってだんだん落ち目になっていてしまう。結局3年以内、3年も続かないというのがほとんどの会社の現状であります。どこに行っても結局楽はできないですよね。そういう意味では10年20年30年、ちゃんと業績をあげて利益をあげて続いてきている会社というのは、本当に100ある会社の中の7%しかない。そういう状況ですから、そういう意味ではちゃんと10年20年続いて利益があがってる会社で働いて、自分の人生をその職場でつくっていくということは、健全な仕事の仕方になってくるんじゃないかなと思いますね。**

**そのことのためにも、やっぱり新入社員にどういう風に会社で仕事をすることの喜びや醍醐味や素晴らしさというもの感じさせてあげるか、という配慮を持った丁寧な社員の育て方を経営幹部の方が、もっともっと考えていく必要があるように思いますね。それはまさに新入社員の方々がまた会社を育てていく、つくっていくになって、ちゃんと働いてくれることが上司の生活を支えていくことにもなってきます。ですのでやっぱり順送りでちゃんとお互いが育て合って、利益を分かち合うという形に持っていかないといけないと思います。そのためにもどんな人間にも短所は半分ある。短所を見たら好きになれん。なので長所を見て、長所を伸ばして、長所を使ってあげる。そういう配慮で人を育てるということをしていく必要があるのではないかなと思います。**

**上司の部下に対するイジメ、パワーハラスメントというものも早期に発見して、それを訂正して乗り越えていくということをしないと、会社においても学校と同じような不安感が出てくることになりますから、ぜひ経営幹部の方々はそういう事態に陥らないように、部下の教育の在り方というものをもっともっと愛を持って考えるように。とにかく成長させるためには、「やった！できた！わかった！」という達成感を積み重ねていくことが、仕事の喜びや醍醐味を感じさせる第一番の原理ですから。そういうことで手取り足取り丁寧に教えてあげる。そういうことが会社全体の発展に大きく寄与することになってくると思います。**

**その次の課題、第6番目は、「消費税の増税は悪政である」と書いてありますけど、とにかく今、政府は民主党もそれから自民党もだいたい消費税の増税には賛成という形で政治を進めるとしております。これはある意味で政府に政策を実現していくための金がなくなったという状況です。そのお金がなくなったから、足らない分を国民から取れば良い、というのが増税ということなんですよ。だから言ってみれば、昔のあの悪代官みたいなもので、自分にお金がなくなったら庶民から税金を取れば良いという考え方。だから消費税の増税も悪政のひとつなんですよね。減税は善政の証であります。そういう意味では消費税の増税は、多くの国民が「致し方ない」と言って、それを受け入れてしまっている雰囲気が多いんです。けどこれはある意味で政治家の無策、政治家に知恵がないから消費者に増税を要請せざるを得ない状況になってきているので、増税しないでもちゃんと財源が確保できるような政治の仕方を考えてもらいたい。ということを国民が言わないとといけない状況だと思います。増税すれば確実に消費は減退しますよね、お金を使わなくなりますから、ますます景気は悪くなります。**

**しかも増税、消費税の増税した分を何に使うかと言ったら、社会福祉に使うと。生活に困っている人たちを助ける、そのことのために消費税の増税を使うんだ、と言っているわけなんですけど。これは明らかにヨーロッパの国家的財政破綻に通ずる、そういう道、後を追ってると言えます。本来ならば、お金というものは景気を良くして、たくさんの仕事をつくるような形に使っていかなければ。国家は発展しませんし、良くなりません。経済を再生させる、経済を活性化させるということに金を使うんじゃなくて、生活に困っている人を助けるために金を使う。そのために消費税を増税するんだ、というのは明らかに福祉に頼った国民をつくってしまう、援助をあてにする国民をたくさんつくってしまうことになってしまった。その結果、ギリシャもイタリアもスペインも全部駄目になったんですから。福祉政策というのは何かいいように見えるんですけどね。だけど福祉的なことを推し進め過ぎると、「働かんでも金が貰えるんや」となるとやっぱり労働意欲がなくなって、働かなくなってしまう。怠け者になってしまうという状態になるんですよね。これは福祉政策の大きなマイナス面で、社会主義国家というものが最終的に崩壊するのは、全部国家が国民を怠け者にするからです。生活に困れば国家が助けてあげるという体制をつくってしまうからですよ。働かんでお金が入ってくるから、働くことが損みたいなことになってしまって仕事をしない人が増えてくる。これが日本でも生活保護世帯が激増しているということの原因になっています。**

**とにかく国家として考えなきゃならんことは、できるだけ増税でなく国家の政策によって経済を活性化させる。そして企業からあるいは国民から税金を増やすことによって所得税から国家にちゃんと入ってくるという状態をつくることが、健全な国家再生の基本であります。そのことのためにどういうことをしたら良いのか、それが七番目です。**

**「雇用の創出と内需拡大」。日本はまだまだ外国に物を買ってもらって、そしてお金を儲けるという後進国的な他国におんぶにだっこというか、他国をあてにしたそういう国家財政の在り方をまだ持ってしまっている。だけど本当に自立した国家というのは、外国の助けを借りないとやっていけないのではなくて、自分の国の中での内需を拡大して、そのことによって経済を活性化させるという方法を考えないと、いつまで経っても、アメリカ頼み。昔はアメリカがくしゃみをしたら、日本が風邪をひくと言われました。今は中国がくしゃみをしたら日本が風邪をひく。常に外国の経済状態に日本人は振り回されて、そして経済はなかなか思うように動かない状態になってしまっているわけです。これがいわゆる、本当に自立した財政を維持することができない後進国的な体質を持った国家の在り方。本当に内需拡大という形で国を発展させるためには、そのためにはやっぱり仕事量をたくさんつくらないといけない。雇用が今言われていますが、大きな会社が毎年毎年何千人何万人とクビを切っているわけですよ。海外に出してる支社においてもそう。経済は沈滞していますから生産量が減ってくるので、そんなたくさん人数を抱えている必要はないと。社員を抱えていればいるほど、給料を払わなければならないですから、会社の経営が貧しくなってしまうと。利益が出るまではできるだけ人減らしをしなければなりません。これはまぁ当たり前なんです。とにかく生産量が減ってくるから、そんなにたくさん人は要らないという悪循環に陥ってしまっている。**

**どうすればこういう状況を抜け出せるのか。これは感性論哲学では前々からお話をしていることなんですが、日本再生最後の切り札、日本を本当に経済的に豊かな国家にしていこうと思ったら、今何をしなければならないか。日本最後の切り札は大遷都だ。東京からまったく新しいところへ首都を移すということを考えないと、日本は再生・再浮上できないというのが感性論哲学の結論であります。遷都というのは、だいたい300兆円ぐらいのお金を使う必要がある。今日本には1400兆円を超える金融資産が眠っていると言われています。これは国内に限らず外国に預けているのも全部含めて、当面使わなくても良いと思われるお金が1400兆円以上ある。また国民に対する借金、国債も1000兆円ある、そういう状態なんですよ。差し引き400兆円ぐらいはまだ余裕がある、という段階なんですけども、あと2〜3年すればあっという間に借金の方が貯金とどっこいどっこいになってきてしまって、もうどうしようもないという国家財政の破綻に近い状況になっていてしまいかねない。早く眠っているお金を流動させて、そして国家財政を健全に持っていくということをしなければならない。そのための事業として何をするか。大遷都。東京からまったく新しいところへ首都を移す。そうしたらいっぱい建物を建てなければなりませんし、それに付随していろんなものが必要になってきます。そして全産業が潤うという状況になってきます。仕事は無尽蔵に出てきます。雇用の問題なんて一度に吹っ飛びます。**

**けれど、今の政府の雇用対策というのは、毎年毎年雇用対策に何兆円を出している。雇用対策にお金を出しても仕事が減っているんですから、雇用は増えるはずがないんですよ。お金を雇用対策で政府が出すんですから企業はどうしてもそれを借りてあげなければならない。政府・日銀が出したお金を借りて何に使っているかと言ったら、使い道がないもんですから企業買収に使ったり、あるいは投資に使っている。そんなことでは絶対雇用は増えませんからね。雇用を増やそうと思ったらお金を出しても駄目。仕事量をたくさんつくらないと出てこない。そのためにどうするかと言ったら、大遷都。そして、無尽蔵な仕事量をつくる。失業は吹っ飛びます。雇用は日本人では足りず、外から雇ってこないと…というレベルに。遷都というのは最低50〜100年右肩上がりの経済状況が続く大事業ですから、確実に企業は毎年増益、増益で成長していく。しかも300〜500兆円というお金が流動すれば、波及効果は10倍と言われていますので、海外から3000〜5000兆円というお金が舞い込んでくる。日本がそんなに発展するのなら、日本の土地を買おう、建物を買おう、日本進出を果たそうということが増えて、日本が大金融センターになる。そうなれば株価は高騰し、8000〜9000円と言われているものが、日本の平均株価は10万円になりますよ。今どんな株を持っていても全部10倍になりますよ。笑いが止まらない状態になりますよ。会社においても給料は倍に、ボーナスも倍に。そうなって初めて日本人は豊かさを感じるんですよ。**

**遷都というのはいずれ、必ずやらなければならないときが来るんですよ。歴史を見れば明白で、新しい風土、都を移すことによって日本の歴史はつくられてきた。遷都することによって新しい時代に入っていった。これまでの時代から決別をして新しい時代へ入ろうと思ったら、どうしても遷都をセントバーナード。しないといけない。遷都をしないと日本民族の新しい底力は湧いてこない。それはこれまでの歴史を見てもわかるわけです。環境を変えれば、新しい環境への対応でまだ出てきていない潜在能力が出てくる、という遺伝子における考え方があります。環境が変われば新しい潜在能力が出てくる。環境を変えることで新しい遺伝子がスイッチオンになって出てくる。これは村上和雄先生という世界的な遺伝子研究の権威が言われていることです。環境を変えることによって新しい潜在能力がスイッチオンになって出てくる。それが新しい時代の日本をつくっていく力になっていく。環境を変えないと日本民族の底力は湧いてこない。ぜひ建築業界や不動産業界の方が団結して、そして一時も早く大遷都を敢行することによって日本の再生を図る、という大きな事業を実現することを団体の力、組合の力、国民の力で政府に要請して、我々自身の生活を向上させていくことを考えていかなければならないかと思います。**

**とにかく東京に都ができてから400年以上経っているんですから、いかに広い関東平野といえども持っている潜在能力、キャパシティはとっくに超えてしまっている。関東平野は国を発展させる力を失っているんですよ。だからどれだけお金を使っても国家は浮上しないんですよ。新しい風土に持っていって、新しい風土からエネルギーを貰うことによって日本は新しい発展段階に入ることができます。東京は近代日本を支えた都としての文化的価値を保存しながら発展させる、ということを東京では考えなければならない。ちょうど京都が中世日本の文化的価値を保存しながら世界的な大都市であるように、東京も近代日本の文化的遺産を保存しながら世界的な大都市として発展する…そういう道を考えていかなければなりません。**

**とにかく今日本の政府において、すぐにでもしなければならないことは大遷都なんですよ。これをすれば企業は莫大な収益がありますから、増税なんて全く考えなくてもいい。大インフレになってきますから、インフレになれば国民に対する借金、国債の借金1000兆円ありますけど、それも企業の収益が上がって税金が増えてくることによって、ますますより急速に返すことができていって、国家財政は健全化します。とにかく眠っている、流動していない貯金の1400兆円をどのように使って、それをどういう風に活かして国家の発展に結びつけていくが、今一番大事な財政を活かす課題であります。ぜひそのことをよく考えてみてもらいたいんですよ。では、どこに日本の首都を移すのか。**

**これは感性論哲学では、最終的に広島を中核とした中国地方5県を大首都圏にするという計画を持っております。なぜ広島を中核としてということになるか。これから世界が目指すものは平和な世界だ。平和の原点と言ったら広島だ。広島に首都を持っていくことで、日本は世界に平和を実現するためのリーダーとして、平和の盟主としての地位を獲得することができる。広島を中核として中国地方5県、広島・山口・島根・鳥取・岡山を首都圏とすることによって、日本の中心は太平洋側から日本海側へ移していって、日本海文明という新しい日本の国の在り方をつくっていく。これが日本に新しい時代をつくるための大きな基盤になるわけです。なぜ、日本海文明なのか。これからはアジアが燃える。太平洋側というのはアメリカとの関係を重視した日本の在り方。これからは日本海側を開発していって、日本海側と太平洋側のバランスのとれた国土の在り方をつくっていく。アジアを睨んだ日本の首都をつくっていく。日本海文明をつくって日本の新しい在り方をつくっていくための方法であります。これを実現するためにはいろんなことを考えなきゃなりませんので、そのことも感性論哲学で考えていますが、とにかくは本当に歴史をつくるということをこれから日本がやっていく。またアメリカに代わって世界の指導者としての役割を果たしていこうと思ったら、大遷都することによって世界の経済を活性化する。それはなぜか、海外からたくさんのものを輸入するから。海外の経済を助けることにもつながる。そういう意味でも今こそ日本がアメリカに代わって世界人類の指導者として立ち上がるためにも、大遷都をやって日本人が内需拡大という方法で国を活性化させるということをしていく。そのことによって雇用の問題も解決する。そういうことも皆さん方も考えてもらって、建築業界と不動産業界は大遷都の主体になりますから、大きな声で国に要請してもらいたいと願って、今日の話を終わります。どうもありがとうございました。**